SHINCLUB 86

(株)辰　東京都渋谷区渋谷3-8-10　JS渋谷ビル5F　　tel/03-3486-1570　　fax/03-3486-1450　　URL:http://www.esna.co.jp

ペットサウンズビル　撮影：平井広行

今月のトーク/monthly talk

レコード店へ繰り出そう♪

「“Pet Sounds” ペットサウンズ」と聞いて、ビーチボーイズの有名なアルバムが思い浮かぶあなたは、かなりのロック通。「若かりし頃、いろんな音楽を聴いたのに最近はとんとご無沙汰」という方も、今月ご紹介するこのビルのレコード店に立ち寄れば、懐かしい音楽とともに青春時代を思い出すかもしれません。

写真は武蔵小山の「ペットサウンズ」というレコード店のオーナーがこのたび駅前再開発に伴い、移転して、新しく建てたビルの屋上テラスです。広々としたデッキと開かれた室内空間は、ご家族や音楽を通じて知り合った方たちとの楽しい憩いのスペースとなることでしょう。

お店では、「店長お奨め」とか「今週・今月の１枚」など、売り場に並んでいるCDに付けられた店長と息子さんの自作のコピーが目を引きます。中には昔聴いていたバンドの「メンバーの娘です」とか「息子です」と書かれたものも。そんな注釈をつけた新人の新譜は思わず手にとって試聴したくなります。

いまや、インターネットのサイトでワンクリックすれば、CDは簡単に手に入りますが、お店にやってきて店長の薀蓄に耳を傾け、改めてアルバムのプロデューサーやプレイヤーの関係を知ることで、知識はますます深くなり、気に入ったアーティストの別のアルバムも聴いてみたいという思いにさせてくれます。美しいジャケットを見つけて「ジャケ買い」したり、若い頃は出来なかった「大人買い」もしてみたり、実際のお店ではいろいろな楽しみ方があるのです。なにより店長とのおしゃべりが、一番でしょう。

「この店のことを知ったのは落語の情報誌だったというお客様も見えたことがあるんですよ。」と思わぬ引き合わせを披露してくださる店長。お笑い関係の人が雑誌に店の紹介記事を書いてくれたり、近所にあるレスラーの高田延彦の道場に取材に来た落語家の春風亭昇太が編集者に連れられて店を訪れたりと、コアな音楽ファンにはその存在をよく知られている店なのです。

音楽知識の深さを買われて店長自身がライナーノーツや専門雑誌の執筆を依頼されるなど、音楽を通していろいろな分野の方との交流の輪が広まっていきます。お話を伺っているうちに、小中学生、高校生など若い人たちに、もっと音楽の魅力を知ってほしいというお気持が伝わってきました。

ビーチボーイズ、ビートルズ、ボブ・ディラン、ローリングストーンズ、ジミ・ヘンドリックスなど、60年代ロックの王道プレイヤーだけでなく、山下達郎や吉田美奈子、はっぴいえんどなど、70年代の日本の新しいポップスを作ったアーティストたちへの店長の好みも伺い知ることができて、少し年下のこちらも重なる部分を感じてうれしくなりました。

最近はラジオ番組の良さが再認識されているようです。i-pod もMP3も時代を反映して避けられないものかもしれません。でもお店に行って、レコード、CDを買うという行為は特別なのです。

家に帰って息子の本棚に“Pet Sounds”のCDを見つけたときは、我が家の音楽環境もまんざらではなかったかな、とちょっとほっとしました。

ペットサウンズビル

変貌する武蔵小山駅前に一品物の個性的なビルが誕生

武蔵小山は現在、東急目黒線の駅前再開発が進行中である。この商店街で長年レコード店を営んできた建て主は、再開発移転に伴い、駅前に新しくビルを建て、1階にご自身の店舗を置くことになった。

駅前広場に面した最適のロケーションに建つビルとして、駅前広場にいかにアピールするかがこの建物に与えられた第一の条件である。しかし広場をイメージしながら特別な位置をどう生かすか、現在の広場は雑多な工事現場でしかない。品川区の計画のパースを見せてもらったが、広場が描かれているだけで、駅ビルについても正式な計画の発表はまだなされていない。ただ、目黒線は地下化され、駅前広場完成を機に周辺環境が視覚的・動線的に開放されることが予想された。その関係をできる限り建築が遮断しないように、駅前広場と内部空間との視覚境界を少なくすることで駅前広場からも各階の人の動きが見える、個性的なビルとしてアピールできればいいのではと考えた。

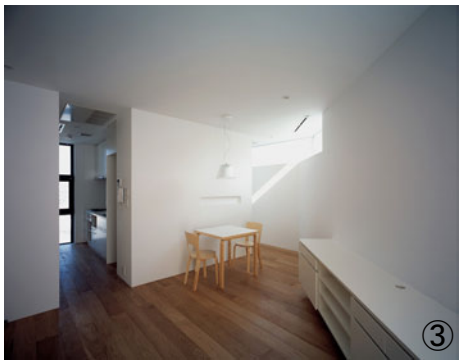
規模や構造については、いくつかの案を経て地下1階地上6階（6階は屋上スペース）となり、コンクリート打ち放しを提案した。コンクリートはタイルにはない、経年変化を見せてくれる素材である。コンクリートの汚れやクラックは長期的に見れば必然的に起こるもの、焼き物のように一品物という考え方ができる。他にはない、個性を持つビルとして、武蔵小山に残る存在感を示してほしいと考えた。

1階の建て主の店舗を除く、地下1階から4階まではテナントが入る。ファサードとして、開口部をどう見せるか、建て主といくつかの案を検討した。鉄骨造で全面ガラスのプランや足元からの全面開放の是非など模型も数点作成し、結局「できるだけ大きな窓」という提案に対し決定要素となったのは、看板であった。以前も店舗ビルを所有されていた建て主は、看板はなるべくメンテナンスフリーにし、テナントの入れ替わりに際しても手間がかからず費用がかさまないものを要望された。そこでこの建物の壁構造を生かし、各階の店舗の看板を開口部の向かって右側の内部壁面に取り込み、店舗が変わっても外側からの作業が必要のない解決を行った。ファサードは広場に面した東側に大きな開口部を作り、本来明るい南側道路の方には対面に雑居ビルが多くアピール性も駅側からはそれほど期待できないので、そちらに鉄骨の外階段と店舗入口を設けることにした。外階段はファインフロアの囲いで採光と通風を確保しつつ、視線を遮る効果を持たせている。

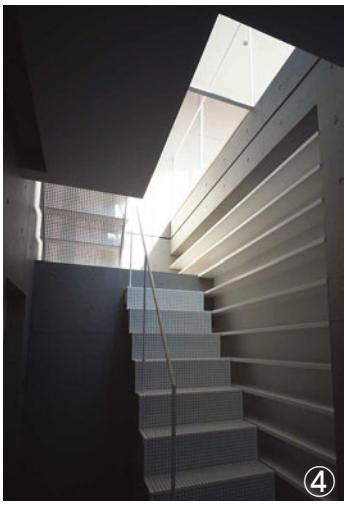
一方、設備面では、この地上6階というビルの規模はちょうどキュービクル（変圧装置収納箱）を入れるか入れないかという選択に迷う大きさである。通常屋上に置くことが多いが、建て主が「飲食店をテナントに入れない」という明確な方針をお持ちで、将来的にもテナントと良好なコミュニケーションを持ち続けられるであろうことから、ビルの利用者全体で設備利用について分け合う可能性を信じ、電気は低圧でいけるのではないかと判断した。結果、屋上テラスにキュービクルを置かない、広々とした空間を確保することができた。

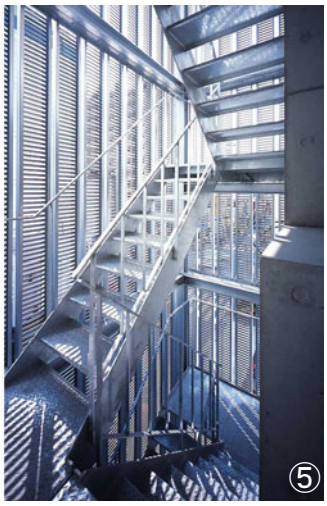
住居部分は、5階と6階（屋上）の2層。5階住居部の開口は、外部の気配を繊細に感じるように限定し、5階のエントランスから屋上にかけてはむしろパブリックな感覚のスペースとした。屋上テラスはパーティスペースとして、建て主親子の音楽を通じた様々な交流の場として、機能していくことであろう。

（ Atelier S+ アトリエエスタス建築設計事務所　清孝英氏　中川佐保子氏　談）



所在地：品川区
用途：専用住宅+店舗
構造：RC造+一部鉄骨造
規模：地下1階　地上6階
設計：清孝英・中川佐保子
／Atelier S+
　アトリエエスタス建築設計事務所
竣工：2007年2月
撮影：平井広行





①全景。店の前は現在、駐輪場となっているが、再開発後は広々とした歩道スペースとなる。②東側から望んだ上層階の夕景。③5階居住スペース。ハイサイドライトの窓を生かしたシンプルなデザイン。採光と通風を確保しつつ、外部環境を繊細に感じることができる。④5階エントランスから6階への吹抜空間。壁面全体をCD収納棚としている。⑤南側の外階段。防火扉で仕切ることなく、採光や通風にも一役買っている。⑥レコード店のビルらしい演出が施された1階郵便ポスト。30cmΦのレコードを模したデザイン。⑦店舗入口。エキスパンドメタルの引戸。店舗へは、中に入って左側の外階段かEVを利用。

株式会社　ペット・サウンズ

今月は、ペットサウンズビルの建て主であり、1階のレコード・ＣＤ店“PET SOUNDS RECORD”の社長、森勉氏にお話を伺いました。

森様は熱心な洋楽ファンとしての音楽に対する知識の深さや、お店のお客様に対する心遣いの細やかさでお得意様も多く、専門雑誌への寄稿やラジオ番組への出演などその活動は多岐にわたります。
ご子息も現在はご一緒にお店の仕事をなさっています。地域でご商売を続けていく上で、日頃感じられていることなどを、新しい店舗で取材しました。

PET SOUNDS RECORD
品川区小山3-27-3-1F　TEL:03-3787-0818　FAX:03-3482-1691
http://www.petsounds.co.jp

写真左：入口右のショーウィンドウが、店舗の看板を兼ねる。
写真右：店の名前の由来になった、ビーチボーイズのアルバム“Pet Sounds”。

森氏も寄稿する、音楽専門雑誌の企画では『60年代ロックアルバムベスト100』の No.1 に輝いた。アメリカ西海岸音楽の代表バンド、ビーチボーイズのブライアン・ウイルソンが、時代性を超えたサウンドを発表した名盤として、今では評価されている。森氏の音楽に対する憧憬の深さ、心意気をここに感じることができる。

―ビルの工事についてはどのような感想をお持ちになりましたか。
森：まず、一番良かったのは設備や電気のことまで細かく配慮してもらえたことですね。店舗のスピーカーコードなど表に出てくるものの配線が予め出ていて、繋ぐだけというのがありがたかったですね。デザインについてもしつこいくらい設計の清さんと検討しました。コンクリートの打ち放しはもともと好きです。こだわったのは駅前広場の方向に向けてのアピール性。どうしたらいいか、という案を何案もきちんと出していただけました。テナントにはチェーン店展開しているようなお店には出来れば入ってほしくなく、仕事そのものに熱意がある方を希望していました。地下１階のイベントカフェ、4階の整骨院は旧知の方です。地下１階のカフェは、昔のレコードをかけたり、落語を打ったりと面白いお店ですよ。結局2,3階もリラクゼーションスタジオ、美容院と「癒し系」の業種の方が入りました。

―武蔵小山で長年ご商売されていらっしゃいますが・・。
森：26 年間この地でレコード店を営んでまいりました。品物はCD、DVDなどどこにでもあるものですが、商売の基本は「お客様を大切にしたい」ということにあります。お得意様はもちろん、新しいお客様の開拓もしなくてはなりません。「お客様ありき」の姿勢で、単にマニュアルに沿った通りいっぺんの接客ではなくて、個々のご要望に応えられるように知識をいつでも蓄えていたいと考えています。時にはうちにない CD のお問い合わせもありますが、「ここに聞けばわかる」「あの店にありそうですよ」という情報をお伝えしていくことで、次に繋がる信頼関係を作ることができると思っています。自分自身がお店の人にやってもらってうれしい、と思うことをするだけです。

―地方だけでなく、駅前商店街の活性化は今大きな問題になっています。
森：武蔵小山でもここ 10 年で商売をおやめになってしまった老舗が多いです。アーケード（「パルム商店街」全長 750mを誇る）は昭和 30 年代に出来たもので、そろそろ店主の方たちがリタイヤに入る世代。自分も商品としては流行りのあるレコード、CDを扱う仕事を続けてきて、50 歳過ぎても一人でやっていくことの辛さを感じた時期もありました。辛い商売を続けるよりも、賃貸住宅にして貸した方が得ですよと言ってくる人もいますしね。しかし息子が小さい頃からの環境もあるのでしょうが、一緒に商売を継いでいきたいと言ってくれましてね。レコード店などでアルバイトや社員をして修業し、5,6 年前に店に戻ってきてくれました。この新しい店はすっかり彼に任せていますよ。
（お店のホームページでも息子さんの陽馬氏の読み応えのある文章を見ることができる。）

―最近の音楽環境についてはどのように見ていらっしゃいますか。
森：僕自身は、ジャンルへのこだわりはなく、音楽そのものをずっと愛してきました。僕らがまだ若い 60 年代は音楽業界がまだ成熟していなかったから、皆で１つのものをいろいろなメディアで共有できた時代でしたよ。ポールモーリアが流行ったら、ラジオでもレコードでもいろいろな場所で皆が耳にして楽しんだものです。ビートルズももちろんそう。ミュージックライフとかFMレコパルとか総合音楽雑誌も音楽好きの若者は皆で読んでいました。今は何が好きかでジャンル分けしてしまって、却ってお互いにコミュニケーションがとりにくくなっていると思いませんか。。ヒップホップの人、ジャズの人、クラシックの人、皆マニア化してしまうんです。昔もマニアと呼ばれるオタクのような人はいたけれど全体で見れば 10%ぐらいだったのではないですか。今は 95%そんな感じですね。売り出す方も初回限定盤などの付加価値をつけて聴くほうに足かせを作っている気がします。放送局もレコード会社とのタイアップ優先で、少数派のリクエストなんてほとんど受け付けなくなっていますね。
皆で普通に聞ける音楽番組なんかあるといいんですよね。小学生や中学生が初めて何かの音楽に触れて感動する瞬間、出会いの場面が減っていると感じます。ケーブルテレビにしても専門チャンネル化して、最初からマニア向けを意図してしまっている。やっぱり地上波のテレビ番組で、子供が偶然出会った音楽に惹かれる自分を発見する―そういうことがないと、音楽ファンが育ちません。簡単に入れる道筋が必要だと感じています。

―森さんは、レコード雑誌などにも文章を寄せていらっしゃいますね。店内の POP も熱のこもった、思わず品物を手にとって聴きたくなるコピーがたくさんあります。
森：いろいろなお客様とお付き合いする中で、「文章を書いてみないか」というお声がかかることもあって「ファンの代表」という立場で好きなものだけ書かせてもらっています。店での日々の仕事は楽しんでいますが、原稿を書くというのは大変な仕事ですね（笑）。プレッシャーを感じるときもあります。ラジオのお話が来たこともあります。今FMラジオ局として若い人に人気のあるJ-wave が 80 年代の開局当時に「モア・ミュージック・レス・トーク」という音楽専門局としてのコンセプトを前面に出した『ノンストップ・パワープレイ』という番組を始め、私も選曲者の一人として参加させてもらいました。極力トークを減らしてCMも挟まず、選曲した人のテイストで構成した 30 分番組で、選曲を依頼されたのは僕のようなアマチュアの音楽愛好家やミュージシャンなど 4,50 人ほど。日に６回のプログラムで４年間、これは開局当時ライブラリが少なかったJ-wave にとっていいソースになったはずです。番組の最初と最後にだけ、僕の名前が英語で紹介される、楽しい仕事でした。

20 代の時に店を持つ夢を見て、10 年後また決断の時期があって、物事はいっぺんに実現するものではなくて、段階的に現実になるものだと振り返って思います。若い人にもそういうことを伝えたい。仕事はやはり周りの方との巡り合わせが良かったと感謝しています。仕事以外にも楽しみがあって、またそこからいろんな話が繋がっていくんですね。

―本日はありがとうございました。

①1 階店舗。天井の照明は現し、床は足場板と素朴なインテリアが店のコンセプトを表現している。（デザインは Atelier S+）②CD に付けられた POP を読むだけでも楽しい。思わず手が伸び、試聴したくなる。③開口部右側の壁に各店舗の看板が大きく入る。テナントは「癒し系」業種。

私の1週間 ⑲　辰の現場監督が毎回登場します。

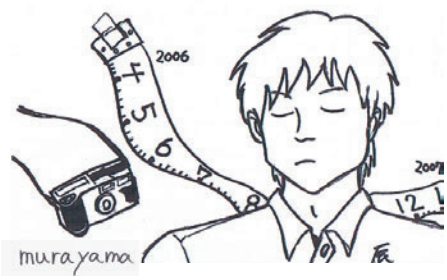
学校を卒業して、辰に入社したのが、昨年の四月。研修も含め、いろんな現場に配属されてきたが、今回、この「T-House（仮称）」で初めてコンクリートの打設工事に最初から携わる機会を得た。想像以上に型枠大工の仕事は大変だ。生コン車も搬入のタイミングを切らせないように、うまく配分しなくてはならない。上司の命令で、業者に的確な指示を出さなければならないのに、しょっちゅう怒られている。朝は七時半に現場に来て、夜九時まで現場事務所にいる毎日だ。

この個人邸の設計者は、建物の建材にこだわることで定評のある女性建築家の先生だ。この工事では躯体はコンクリート打ち放しの外装だが、内装はいろいろな種類のものが入るので、勉強になることが多い。

四月九日（月）

躯体工事も終わり、四月初めから内装の工事が始まっている。

本日は、大工はシナを壁に貼り、塗装屋は、窓枠と建具の塗装を行う。今回は、建具、窓枠のサイズが多種多様でなんと全部で八十種類にもなったと大工が話していた。



今月からは、村山貴がこのコーナーの挿絵を担当します。

タイル屋は二階の床の敷瓦を貼っていく。灰色の、それぞれが微妙に異なる形の瓦を一つ一つ並べていくのは、根気のいる作業だ。家具屋は、家具の棚板を取り付ける。

四月十日（火）

建具屋が取り付けたタモにドイツの健康塗料オスモカラーを塗装。タイル屋は三階の床のタイルを貼る。

四月十一日（水）

左官のアーバンハンズが、コンクリートの壁の補修を行う。

細部にこだわっているプランだが、「打ち放し部分は きれいに出来た」と関係者内で話していた。エレベーター前の壁のPコンの穴を目立たなくするため、設計事務所の担当者がピンポン玉を押し当てて埋めていくという作業を行っていた。なるほど目立たなくなった。

敷瓦の貼りこみが終わった。

四月十二日（木）

中庭にテラスを設けるため、型枠を組んだ。庭の植栽などは、二期工事となっている。

また今日から、別途工事で設計事務所の指定した左官職人が作業に入った。一階の居間、キッチン、寝室、サンルームの天井に珪藻土を塗る作業。それから二階から三階への階段室の壁にオレンジ色の漆喰を塗る作業だが、ほとんどアートだ。高い場所と手の届く低い場所の表情を変えるという手のかかる作業だ。足場を階段脇に組む。行き来に気を使う。

常田　俊介

初めてのコンクリート打設、
多様な素材の工事に圧倒される

四月十三日（金）

別途左官工事、天井の続きと居間、キッチンの壁の珪藻土塗り。タイル屋は三階床の漆喰タイルの貼り込み作業。建物は敷地に対し四角形を四十五度にねじったプランになっているので部屋に三角形の部分があり、現場作業は手間がかかる。

四月十四日（土）

防水工事、外部打ち継ぎ部分にシール打ちの作業を行う。建具のペンキ塗り。オスモカラーは失敗のないように塗り、その後ふき取ってクリアを塗る仕上げ。

四月二十日（土）

社内検査、設計事務所検査。これだけ手間がかかるとは思わなかったが、その分達成感があるものだ。今後も頑張っていきたい。

1985年生まれ　長野県出身
中央工学校建築設計科卒業

平成 18年　辰入社

趣味：音楽鑑賞
　　スノーボード

担当した主な物件（設計者）
・T-House（仮称）
（齋藤祐子
　/サイトー級建築士事務所）

TOPICS/INFORMATION

「(仮称）三宿1丁目ビル　新築工事」

下層2層に店舗を持つ、賃貸共同住宅です。SOHOとしても良い立地条件です。

構造：RC造 +一部鉄骨造
規模：地上5階　地下1階
用途：共同住宅＋店舗
設計：北山恒
／architecture　WORKSHOP
完成予定：2008年3月

地鎮祭　　4月26日

インターネット転職求人サイト「リクナビNEXT」に弊社情報がアップされています。

リクルートの転職求人サイト「リクナビNEXT」に弊社最新情報が、5月16日より2週間、アップされます。
今回は、社長森村の半生がクローズアップされた、読み物風。
冒険心あふれる若者だった社長が、今、求める若者像とは？
施工技術者として入社希望の方がいらっしゃいましたら、
ぜひアクセスして、ご一読いただけるよう、お勧めください。
http://next.rikunabi.com/

編集後記

・皆様、連休中はいかがお過ごしでしたか。私は取材もいくつか入っていましたが、6日は社長の千葉の別荘を訪れ、雨にも関わらず、近くの自然食レストランのマクロビオティック・ランチを堪能させていただきました。このあたりは最近、都心から田舎暮らしを求めて移住される方が多いそうですが、このレストランも、マクロビオティック料理研究家中島デコさんが、パートナーの写真家エバレット・ブラウン氏と子供たちとともに古民家に移り住み、自然農法で古代米や野菜をつくりながら開いているものです。

もともと社長夫婦は、ご夫婦ともこの地の出身。周り中農業指南をしてくれる同級生ばかり。休日には自分の畑で芋などの農作物も育てています。引退後の田舎暮らしは、団塊世代の憧れと言われていますが、いきなり農業というのは、敷居が高いものだそうで、コミュニティになかなか溶け込めず失敗する人も少なからずいるそうです。今一番新しいのは、都会と田舎のダブルスタンダードをうまく使い分ける、社長のような生き方かもしれないと羨ましく思いました。

(株)辰　通信　Vol.86　発行日　2007年5月16日　編集人：松村典子　発行人：森村和男